

莊園の新たなハンター

デス・リッパー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつも通りゲームに勤しんでいたハンターとサバイバーたちの住む館、荘園に新しいハンターが来たらという第五人格というゲームの二次創作：

キャラ崩壊注意!!

目次

C r a z y	M a n o r	9	L a w y e r	5	R u l e	N E W
R u n a w a y	h o l i d a y		a n d		d e s c r i p t i o n	H u n t e r
			t h i e f			
16	13					1

NEW Hunter

莊園の新たなハンター

（莊園）

「へアア…新しいハンターさん大丈夫ですかね…」

「名前は知らんけど…楽しみやなあ♪」

窓に張り付き、来る予定の新しいハンターの心配をしているのはハンターのリツパーと芸者だった。その時窓の外ではバケツをひっくり返したような大雨が降っていた。朝起きて連絡が入ってから優に3時間は超えるがまだ新しいハンターが来る様子はないかった。

「はあっ…はあっ…水飲むか…」

そこには黒いズタズタなコートを羽織った男が岩に座って休憩していた。彼の名はヴァルガ・クアーツ。彼の顔には白い肌の狂人が笑っているような表情の仮面が付けられていた。

「この莊園つてのはこの先か…蜘蛛みたいなやつが迎えに来るって書いてあるよなあ…」

「樂できるといいが……」

ちなみに彼が仮面をつけている理由は顔の火傷である。過去に顔をバーナーで焼かれた過去があり、それ以来仮面をつけ続けている。

「……………」

しばらく経って蜘蛛の様なハンター。結魂者が現れ、ヴァルガが上に乗ると結魂者は莊園に向けて歩き出した。

（莊園）

ヴァルガが莊園に着くと二人の人影があつた。その二人は先程ヴァルガの事を心配していた芸者とリツパーだった。

「はじめまして！リツパーと申します！」

「うちは芸者の美智子や、よろしゅう♪」

「ヴァルガ・クアーツ。」

三人は少し話をしながら洋館へ歩いて行つた。

「ん、珍しいやつが来ているな……」

「ヴァルガってゆうんやつて。鼻屑にしたってえな。」

「そうか、私はハスター。よろしく。」

ヴァルガは道中のハンターたちに挨拶をすませると食堂にたどり着いた。

「今からなんか作りますけどなにがたべたいですか？」

「……………軽いものでいい…」

「軽いものですか…火が通ってるものなら大体作れますけど…」

リップパーがそういうとヴェルガは水を飲み息を少し吐く。

「頼む。」

「わかりました。」

「美智子…その火…どうにかしてもらえるか…？」

ヴァルガはぐったりとした様子で呟いた。

「ちよっ!? あんさん大丈夫け!？」

「火…は…どうしてもダメなんだ…」

「ちと待っててえな! 行燈のやつ持ってくるさかい!!」

「ヴァルガさん…少し動かしませよ…」

芸者が行燈の周りのやつを取りに行っている間にリップパーはヴァルガを寝かせようとするが完全に体調を崩したのか動かすことができなかつた。

「参りましたねえ…」

「……………任せろ。」

特異体質を使ったのか突然現れたハスターは触手を周りに生やしてヴァルガを寝かせた。

「やっぱりな……さつきから壁の照明に反応していたから火にトラウマがあつたんだろう。すこし休め……」

「すまん……」

ハスターが食堂を出ると入れ替わりで芸者が入つて来た。

「持つてきたで！今かけたるからまつててえな！」

芸者が行燈をかけるとヴァルガの体調は少しずつ回復していった。

Rule description

「……………さて、この荘園付近の場所を使ったゲームのルール説明をしましょう。」

「わかった…が、質問がある。今膝の上に乗ってるこのガキは誰だ。」

「泣き虫やね。同じハンターだから気にせんで。」

ヴァルガは不満そうに質問をしながらも泣き虫の頭を撫でていた。

「まずは追撃についてです。」

リッパーがその立派な爪でフォークを弄びながら微笑んだ。

「追撃はね、武器を持ってサバイバーのお兄さんお姉さんを追いかけるの！」

「殺害してもいいの？」

「ダメです。」

ヴァルガの質問にリッパーは即座に答えた。

「殺すんやなくて気絶させるんよ。」

「その後、ロケットチェアという椅子に括り付けるんだ。」

そこにハスターも加わり、和気藹々とルール説明を続けていた。

「エミリーさん…ハンターさんに新しい人が来てるなの…！あの人も身長高い高いなの！」

「そうなの？」

雨が止み、ベラドンナの咲く庭でお茶を飲みながら医師と庭師が話をしているとそこに美形のハンターが現れた。

「おや、庭師さんに医師さんですか。何のお話をしているのですか？」

「白黒無常さんも食堂に行った方がいいなの！新しいハンターさん来たよなの！」

「ほう…新しいハンターがなあ…」

突然白無常は黒無常に変わり、食堂の方へ歩いて行った。

黒無常が食堂に入ると黒いコートの男が貴族服の男を背負って部屋に連れて行くこうとしているところだった。

「…またジョセフは寝ぼけてこっちきたのか…」

「ああ、まったく…新入りに迷惑をかけおつて…」

食堂には狂眼、リップパー、芸者、写真家、ヴァルガ、白黒無常、泣き虫、結魂者がいた。黒無常はそれを見て、口を開いた。

「復讐者と道化師も連れてくるか？」

「ああ、あと断罪狩人を連れてきておいてくれ。」

「黄衣の王はどうする？」

「ハスターならさつき会った。問題ない。」

ヴァルガが即座に答えると黒無常は納得した様子で三人のハンターを呼びに行った。

ハンターがみんな揃うとヴェルガの事情を知らないハンターの何人か（道化師と断罪狩人）が行灯のカバーを外そうとしたが何故か事情を知っていた黒無常とカバーをつけた本人である芸者、初めて見た時から予測をしていた黄衣の王に威圧され、静かに席に戻った。

ハンター同士の自己紹介が終わるとヴァルガは部屋で本を読んでいた。

「ハンターさん、ハンターさん！」

「ん？誰だ？」

「サバイバーの庭師、エマなの！」

荘園ではサバイバーも一緒に住んでると聞いていたヴァルガは扉を開いてやる。すると何人かのサバイバーが入ってきた。

「おい、その筋肉バカっぽいのは、それに触るな。俺の宝物のオルゴールだから。」

「せめてオフエンスって呼べよ！」

「まあまあ…オルゴールなら私に任せて。」

踊り子がオフェンスがオルゴールを取る前にオルゴールを回収し、ヴァルガのすぐ近くに置いておいた。

「感謝する。」

そのあと自由気ままに話し、夜を迎えた。

その夜、ヴァルガが大きな喧嘩を目にすることは殆どの人がわかつてはいたが本人は全くそれを知る由もなかった

Lawyer and thief

ヴァルガは自室から出て食堂へ向かえば二人の男が喧嘩しているようだった。周りの人たちは「またか…」と言ったような様子だったのでヴァルガは無視して自分の席のネームプレートを探していた。

「オイ！そのテメエ!!!」

「…ンだよ…」

ヴァルガは黒い帽子を被った男に絡まればうざったそうに言葉を返した。

「テメエ何してやがんだ!」

「食事をしに来たんだ、別にそれ以上でも以下でも無い。」

ヴァルガはため息をつきながら席に着くと食器が揃えられていない事に気がついて落ち着いた口調で口を開いた。

「すまない、だれか食器の置いてある場所を教えてもらえないか?」

「こつちなぬ!」

ヴァルガが食器を取りに行っている間二人の男は喧嘩を続けており、ヴァルガはため息をつきながら夕食を諦め、朝まで眠ろうと部屋に戻った。

「……さん……ガさん……」

「ん……」

深夜になり、寝ぼけ半分で起き上がり声のする方を向くとドアの向こう側から誰かが話しかけてきている。

「この声は……だれだったか……」

小さく声を漏らしつつ扉を開くとそこにはラベンダーの香りのする女がいた。

「…………ウイラ・ナイエルか。入れ。」

「ありがとう、今日の夕食。持ってきたから食べて。」

「……お前は腹減つてないのか？」

「私は食べたわよ。あの後あの2人はハスターとリツパーに連れてかれてお開きになったわ。あなたは食べないで部屋に戻っちゃったから心配になってね。」

「……そうか。」

ヴェルガが料理に手をつけようとする小さく、可愛らしい音がウイラの方から聞こえてきた。

「……腹減つたんだろう……一緒に食うか？」

「……うん……／／／」

顔を真つ赤にしながらもウイラはヴェルガの膝にちよこんと座つて一緒に食べた後、ウイラが駄々をこねた為、二人で添い寝した。

翌朝にウイラの服が乱れていたのを見てほかのサバイバーにニヤニヤと冷やかされているのをヴェルガが寝ぼけ半分で、ハスター、リツパー、白黒無常が微笑ましそうに見ていたのはまた別の話。

「…なぜ付いてくる。」

「…別にいいでしょう？私の勝手よ。」

「…好きにしろ。誰かに襲われても助けてやらんからな。」

「自分の身は自分で守るわ。」

「そうか…」

ヴェルガはハスターの誘いでダブハンというものに当たっていた。

「にしてもペアを組んでいるものが多いな。」

「私達独自に考案した『片思い戦』ってルールよ。ペアを作るとそのペアの人だけ助けられるの。」

「…ふうん。」

ヴェルガは左手の義手をうまく使つて手際よく椅子に座らせていった。

「…ハスター。お前のペアのサバイバーはなんていう名前なんだ？」

「イライ・クラークだ。使い鳥で仲間を守ったり最初にハンターの姿を捉えることができる。にしてもお前が攻撃してこなくて助かった。私では助けられんからな。」

「こういう余興には時に慈悲も必要だろう？」

「いいことを教えてやろう。我々ハンターにも余興の一つとして“やさ鬼”というものがある。やさ鬼を始めるのはいつでもいい。特定のやつをあえて逃がしてやるかみんなど仲良く暗号機ツアーというのもまた一興だ。」

「ふうん…覚えておこう。」

「もしや…ヴェルガは調香師に骨抜きにされるかもしれぬな。」

「可愛いからな。」

二人で雑談しつつゲームは終わり、サバイバーもハンターも各々のへやにもどった

M a n o r h o l i d a y

その日、外は雨が降っていた為その日予定されていたゲームは全て中止となった。その日ヴァルガはウイラ・ナイエルと同じ椅子に座って本を読んでいた。ヴァルガの膝の上にウイラが座り、ヴァルガと同じ本を読んでいる。

「……………仲間と話したりしないのか？」

「今日は何人かは部屋から出てこないわ。白黒無常はもちろんのことエマもナワーブも。」

「白黒無常は雨にトラウマがあるんだったな。」

「エマはお庭いじりが好きだから雨の時は部屋で工具箱の中身を整備しているのよ。」

そんな話をしながら本を読み進めていった。

「…ナワーブは何をしているんだ？」

「ナワーブは多分寝てるわ。」

「そうか。」

こんな日に限って厄介ごとに巻き込まれるのはヴァルガのパークスキルとも言えるものでウイラを背後に隠れさせれば扉の方を睨みつけた。

「………ピアソン・クリーチャーか？」

「ああ、少しあんたに用があつてな。」

「…お前は信用ならん。」

「あんたが信用ならなくても来てもらう。」

ヴァルガは大きな溜息をつくと事前にウイラに持たせていた鍵を使って転移させれば疲れた様子で椅子に座る。

「…で？なんの用だ？」

「今日はどこも使つてないよな？休みだから。」

「こんな雨の中やるのか？正気じゃねえな。」

「まあまあ…やろうぜ？」

ヴァルガは小さく舌打ちしながら立ち上がればマッチングルームに向かった。

くロビーく

エマ達はゲームが始まると聞いてロビーに特別に取り付けられた観戦スクリーンに視線を向けていた。

「…こういう日に限つて強い悪知恵が働くな、あのゴキブリは。」

「どういふことだ？フレディ。」

「ああ、レオ。あのゴキブリ、厄介な荘園の奴らがこそつてマッチングする日を選んだみ

たいだ。」

「ハスター、まずいぞ！ヴァルガの仮面に仕掛けがされている！下手したら仮面が割れるぞ！！」

白黒無常がスキルで飛んできて一枚の紙をハスターに手渡した。

「参ったな……もうマツチングは終わっているからな……」

「ピアソン……クリーチャーアアアアア……」

「ウイ……ウイラ……？何があつたの……？……？」

「あの泥棒っ……私の意見も聞かず無理矢理に……っ……っ……」

ウイラは何もできないのが悔しいのかスクリーンに映るピアソンの姿を睨みつけていた。

赤の教会

「……面倒だな……」

ヴァルガは仮面に細工された所為か違和感を感じながらも面倒だ面倒だと呟きながら辺りを見回した。

「……………近くの暗号機が揺れているな……」

ヴァルガは特質でその暗号機まで飛ぶとそこにいた空軍は待っていたかのようにヴァルガの顔面に向けて発砲した。細工され、脆くなつた仮面は音を立てて粉碎した。

Crazy Runaway

「っ!!!」

ヴァルガは狂者の仮面が割れたのを理解すると同時に般若の面をつける。そしてすぐに義手で窓枠を超えて逃げようとする空軍を殴る。しかし、運が悪かった。ヴァルガが仮面を付け直したのはクールタイム中。つまり、ルール違反だった。

「ア……アア ツ……………」

ヴァルガが顔を抑えて呻く。本来ならば試合終了するはずのそれは想定外バグが起こった。

「アアアアアアアアアアアア!!!」

目元が赤く光り、意識が潰れる。そして、試合は終わらず。ヴァルガはサバイバーを殴り殺す殺戮兵器と化した。

「謝必安! 范無咎! すぐに赤の教会に向かってヴァルガを止めろ! ワシはナイチンゲールに連絡する!!!」

「了解!!!」

バルクがそう指示を飛ばすと白黒無常は咄嗟に赤の教会に飛ぶ。サバイバーの人員はエミリーの指示の元男子勢は寝かせるためのマットを運び、女子勢は薬やらの支度を整えていた。

「あら？ウイラ誰か見てない？」

「見てないなの！」

「部屋を見てこよう。」

パトリシアがウイラの部屋に向かうと部屋には誰もおらず荘園内のあちこちを探してもウイラの姿はなかった。

「いない、もしかしたら赤の教会にいったのではないだろうか？」

「かもしれないわね……」

「ハスター様。恐れ入りますがウイラを探していただけませんかしら？」

「うむ、任せよ。ヴァルガとウイラは任せよ。」

祭司が状況を察してハスターに頭を下げ、ハスターに願うとハスターは頷き、承諾する。それと同時に瞬間移動で赤の教会に飛ぶ。

「なんだこいつつ?!ルール無視じゃねえかよ!!!」

「いつてえ……いつてえよお……!?!」

赤の教会は阿鼻叫喚だった。暴走したヴァルガにより弁護士は左腕を腕がれ、空軍は勢いよく壁に打ち付けられた影響で全身を複雑骨折し気絶、泥棒は木の枝に突き刺されて吊り下げられており、唯一残った傭兵のみが今逃がっている状況だった。

「ぐっ…そろそろ肘当てもない…逃げきれないっ!」

傭兵が逃げた先にはヴァルガを止めるために飛んでいた白黒無常の傘が見えた。その瞬間傭兵の顔は青ざめ、違う方向に逃げようとするがその瞬間ヴァルガが腕を振り下ろす。もうだめだ、そう思い目を瞑った瞬間。

瞬間移動の音が傭兵の背後に響いた。

義手と何やら湿ったものがぶつかる音がする。

「間に合ったかといえば間に合っていない…か。落ち着け、ヴァルガ。今楽にしてやろう。」

「ほら、あなたはこっちに。」

謝必安が傭兵を遠くに避難させればハスターは上々、と言った表情で触手をあたりのあちこちに生やす。すると触手の影に一つ、小さな影があった。

「む……？」

ハスターが不思議そうに視線を向けるとその影は突如としてハスターとヴァルガの間に現れてヴァルガに何かを吹きかける。

「調香師……？」

ハスターがウィラを視認したと同時にヴァルガは糸の切れた人形のように前に倒れる。ウィラはヴァルガが気絶したのを認識するとヴァルガの頭を抱きしめる。

「……調香師。運ぶぞ。」

「……お願い。」

その後、意図的に起こされたバグとしてナイチンゲールがサバイバー側に罰則を設け、関係荘園にはヴァルガに対して2500エコーの支払いを命じた。そして、泥棒だけは2500エコーの支払いを白紙にする代わりに一定期間の試合出場禁止命令とそとの間の室内謹慎を命じられ、泥棒は部屋から出るのを禁止となった。